

平成 29 年度 第 4 回屋久島世界自然遺産・国立公園における山岳部利用のあり方検討会
議事録

日時：平成 30 年 1 月 29 日（月） 10:30～13:00

場所：屋久島環境文化村センター レクチャー室

■ 検討会開催の挨拶

九州地方環境事務所 加藤国立公園課課長：今日は、朝からお集まりいただきありがとうございます。本年度最後の第 4 回検討会開催となる。第 3 回検討会では、検討会と縄文杉ルート、白谷雲水峡の視察をしてきた。これまで色々な立場からのご意見をいただいたことを踏まえて、今日はビジョン（素案）を本検討会の資料としている。このビジョンに基づいた登山道や利用の管理をしていくことにつながるため、ビジョンは取り組みを進めるために必ず必要なものになる。このため、ビジョンを作成することが目的ではなく、ビジョンを作って何をやっていくかが非常に重要である。来年度の前半ぐらいでビジョンを固めて、登山道管理のあり方をより具体的に皆さんと考えていきたいと思っている。この会議はそれぞれの立場から色々な方々に参加していただき、思うところを言っていただく貴重な場である。今日も会議終了まで、よろしくお願いいたします。

土屋 座長：おはようございます。加藤さんからの挨拶にもあったように、昨年度の後半から始まって 6 回目の検討会になる。検討会は今年度の今日で終わりではなく、まだ来年度も続くという意味ではこのような検討会は貴重な機会ではあるが、年度の締めはある。今日はこのビジョン、基本方針を完全に決めるわけではないが、私の心積もりとしては、大枠は今回の議論の中で決めたい。文言の修正や加筆は次の会までの間に、議論する可能性もある。議事（2）になるが、一言フレーズ（案）が出てきていないため、次回も含めて考えていく。行政の方々は年度で変わる可能性があるため、年度区切りである程度固めておかないと、様々なことが動かない、決まらないということは何度も経験している。このため、今日は非常に重要である。検討会終了時刻は 13 時ということなので、それぞれの議論では時間は限られる。しかし検討会の方針で、なるべく多くの方にご発言いただきたいと思っており、場合によってはご指名することもある。皆様、常に発言したいと思ったら手を挙げていただくように準備をお願いしたい。なるべく一回の発言はコンパクトに、一つの論点について発言いただいて、次の方が発言した後にまた発言していただくようにご協力いただくと、たくさんの方のご意見のもとでまとめることができる。たくさんの方が議論できる貴重な場であるのでご協力よろしくお願いいたします。

■ 議事(1)ビジョン検討にあたっての主な論点

◇ 資料1について

【資料説明】

事務局 日本森林技術協会(高橋)：平成 29 年度の 3 回の検討会、2 回の現地視察で議論して、皆さんからご意見をいただいた。議事（2）ではビジョン（素案）について議論していただくこととなるが、ビジョン（素案）を作成するにあたっての骨格・構成に関する事項ことにこれまでのご意見を整理した。P27～28 は、本年度に検討した内容を記載している。第 4 回検討会では、**5**について検討予定とし

ていたが、第3回検討会と現地視察において、ご意見をいただいていたため、今日は⁵検討を省略させていただきます。

【質疑】

土屋 座長：今の説明のとおり、資料1が基になってこれからのビジョンの検討に入る。これはこれまでの皆さんの発言を事務局がまとめたものなので、議論するというよりはご発言内容の要約が明らかに趣旨がずれているとか、そういったことがあれば、ここでご発言いただくか、後で連絡していただきたい。報告書に記載されるため、自分の発言をここに入れたほうが良いと考えられるのならば、ビジョンに反映する可能性があるため、お知らせ願いたい。そういったことについて、ご質問等いただければと思う。

かなり分量が多いので、持ち帰って再度チェックして、不備や足りないところがあれば事務局にお知らせ願いたい。

■ 議事(2)屋久島世界自然遺産・国立公園の山岳部適正利用ビジョン(素案)

◇ 資料2-1について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：資料2-1はビジョンの構成図になる。このビジョンはどういった骨組みで作ったかを模式図で示している。資料1のP27にはこれまでの検討会で、どんな論点で話してきたのか書かれており、その論点は資料2-1の一番上にオレンジ枠で¹~⁶まで書いている。論点自体がこのビジョンの骨組みを想定しながらつくられていて、その論点にあわせてビジョンをついている。上半分がビジョン、下半分が基本方針である。

【ビジョン作成の目的】は、今までの課題対応型だけではなくて、先を見据えた能動的な管理をすることで自然環境への悪い影響も抑えたいし利用者へもよりよい体験を提供したい、といったことがビジョン作成の目的である。

【一言フレーズ】については、会議の中では日下田さんやその他の方々から、「何か一言で言い表すフレーズがあるといいね」といった話があったが、屋久島を一言で言い表すことは難しい。あえて我々が案を出すよりも皆さんから意見をいただいたほうがいいのかと思い保留にしてある。

【前提となる認識と考え方】は、将来の屋久島山岳部の適正な利用の未来像を示すにあたっての前提とした認識と考え方として3つ記載している。

【未来像・目標】は前提となる認識と考え方を踏まえて、3つ記載している。未来像・目標を100年後としてはいるが長すぎるかもしれないと思っている。未来像の1つ目はどんな自然環境の状態、もしくはその自然環境から得られる体験の質といったものがどういったものであるかの状態を示している。2つ目の「登山者初心者から上級者まで自然を深く堪能できる山(島)とは、どういった人をターゲットにしていくのかということ。3つ目の「人と自然のかかわり方、新しい山の文化を模索し、発信する山(島)とは、屋久島山岳部とは世界や日本の他地域に対してどういったポジションでありたいのかということ」を表現している。

【基本方針】は、この未来像を実現するために、どういった方針でやっていくかを下半分に書いている。黒四角の10項目、白四角は再掲の意味である。右側の基本方針は、それぞれ左側の未来像を実現

するために必要な基本的な考え方ということで記載している。

◇ 資料2-2について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：タイトルはこの検討会の名称「屋久島世界自然遺産・国立公園における山岳部利用のあり方検討会」を踏まえて「屋久島世界自然遺産・国立公園の山岳部適正利用ビジョン」としている。

資料説明【ビジョン作成の目的】

作成の目的は、これまで屋久島は世界遺産になる前後には、世界自然遺産登録や交通インフラの変化によって入込者数が増加した。その後減ったが、今年度は昨年度より少し盛り返しているという変化がある。これまでは、一時的に人が増えたことに対処してきたが、山岳部全体を適正に利用していくための考え方が明確化されてこなかったということは、過去の検討会の議事録を見ても書いてある。このため、課題に対応することは当然必要だが、それだけではなく、より能動的な保護管理をすることで自然を良い状態で後世へ引き継がれるように、来るお客さんにはより良い体験をしてもらうために、こういったビジョンを作成する。

資料説明【前提となる認識と考え方】

前提となる認識と考え方で、3つのうちの1つ目ということで、(1) 保全重要性の高い自然環境になる。段落ごとに説明すると、1段落目には屋久島という山がどのようにできていて、それが水平的に琉球列島の中でどのような特徴があって、島の中では自然の植生、気候にどういった特徴があり、屋久島は「山岳の島」だということを簡単に説明している。2段落目は、屋久島では屋久島の話をするというのは当たり前だが、もう少し引いた目でみると、琉球諸島のうちの1つに属する。私は奄美大島にいたが、そちらは南系の生き物の北限の種が多かった。屋久島にくると南限の種が多いという違いや、2,000m 弱の標高を有する山なので、縦横（標高差・水平的な位置）の関係で生物多様性という観点でも豊かな島であり、「生物多様性の島」と書いている。3段落目は水関係になる。黒潮から始まって、水蒸気が山の斜面を上がって雨になって、雨は水の流れとなって島を駆け下って、その間に島に恵みももたらすし、逆に恐ろしいことももたらし、最終的には海に戻っていくといったような循環ということが書かれている。屋久島は「水の島」だということが書かれている。P2 にあって、4段落目は屋久島が世界自然遺産に登録されているとか、国立公園をはじめとする国内の様々な保護制度に指定されていて、「国内でも有数の保全の重要性が高い地域」だということが書かれている。

(2) 人と自然とのかかわり—畏敬・感謝・遠慮の心—、ここだけサブタイトルがある。1段落目として、私は屋久島に来た最初の年に岳参りに参加したが、屋久島のことを勉強する中で、精神面も含めて山と人とのつながりが昔からあり、今も岳参りという1つの形として残されていると感じた。岳参り自体は屋久島だけで行われていたのではなく、日本の他地域でも行われていたが、世の中変わっていくに従って廃れていったところが多い中で、屋久島では昭和20年代に一度は下火になった頃もあったが、だんだん復活してきて、今でも続いている。そういったことが島の人の心の中には、山に対する畏敬の念、感謝の気持ち、遠慮の心があって、その色が濃いか薄いかは人それぞれであると思うが、受け継がれてきている。2段落目で一番言いたいことは、自然に根ざした文化というフレーズのことを書

きたかった。屋久島だけに残ったという他の島に怒られる可能性があるかと思ったが、屋久島だけに残ったと書いている。3段落目は、一方で昔から受け継いできているものだけではなく、近代・現代にも目を向けて、現代のことも書いている。昭和40年代までは林業の島としてやってきて、昭和40年代以降から変わってきている。昨年度の検討会資料の年表で示した資料を見ていただくとはっきり分かるかと思う。その後、自然を守りながら活用していこうといった時代がきて、世界遺産にも登録された今日では、登山をメインとした観光が島の人たち生活を支えている。直接的、間接的に生計を山が支えてくれている人もいると思う。結論として、今も昔も屋久島の山岳部は島の人たちの地域経済、生活を支えるよりどころとしてなくてはならない存在としてありつづけていることには変わらないということが書かれている。

(3) 次世代の継承と持続的な利用には、非常に守る価値の高い、多くの人をひきつける、すばらしい自然があり、なおかつそこには山に対する畏敬の念を持ち続けて暮らしている人たちがいる。そういったことを踏まえて、ビジョンをどういった考え方でつくったかを①～⑥に書いている。①は自然の価値そのものと、固有な種が多いとか稀少な種が多いとかだけではなく、言葉で表現するのは難しいので「畏敬の念を抱かせるもの」と書いているが、何かそういったものを感じさせるものがあって、そういった部分が屋久島の自然の重要な部分である。単なる自然の価値だけではなく、畏敬の念を抱かせるものを引き継いでいくということを前提にしている。②としては、利用をしないということではなく、利用する場合でも自然の価値や畏敬の念をいだかせるものを損なわないように利用していくということ。③は、そういったものを守り引き継いでいくことの重要性を理解してもらいたいし、そのために利用者には素晴らしい質の高い自然体験を提供していく。④は、地域には昔から続いている自然観、自然とのかかわりがあり、それを踏まえた管理をしていく。昔から続いているから何でも良いということではなく、良いものは引き継いでいく。良いものはそれを踏まえて反映していく。古ければ無条件で引き継ぐということではない。⑤には、未来にも関わることとして、昔のことや今のことを踏まえて、将来、人と自然がどういう関わり方がいいのかを常に意識しながら問いかけながらやっていこうということ。⑥には、屋久島は世界の見本になるような心意気でやっていきたいということである。

資料説明【未来像・目標(100年後の目指す姿)】

(1) のタイトルを一言にするのができなくて長くなっているが、「原生性、神聖性、数千年レベルのときの流れ、つながりと循環、自然の恵みと厳しさが残る山(島)」としている。「～をすることができる」という書き方を中心としている。①は、利用者は樹齢数百年、数千年の巨木や数百年の森、沢、人口構造物がまったく見えないような原生的で荘厳な森林景観を歩くことができる山ということ。②は、ただ素晴らしい景観を見ることができるだけではなく、長い時間の流れなどを感じることができるような山だということ。③は、景観的に素晴らしいというだけではなく、きれいな空気、水そのもの、それらが当たり前にあることのありがたさを感じることができるという山ということ。なおかつやさしい面、美しい面だけではなく、恐ろしさも感じることもできる山ということ。

(2) 「登山初心者から上級者まで自然を深く堪能できる山(島)」ということで、①は、屋久島に来るお客さんは事前に、あるいは島に来てからも登山情報を入手することができて、自分の経験やスキル、どんな体験を求めているのか、そういったものに応じて登山ルートを選択して自然体験をすることができる山を目指す。②は、ルートそのものはランク分けがされていて、それぞれ管理方針が定められて

いる。利用者はそのルートのランクに応じた自然環境の質、体験の質、安全が保証されている。どこのルートも安全と言っているのではなく、ルートによっては保障されている安全性は高い、または非常に低い。つまり自分の能力で行って生きて帰って来いというルートもありえるということ。③は、体験の質や利用による自然や畏敬の念を抱かせるものを、一番の売り・資本とするので、それに悪影響があるかどうかをモニタリングして、その結果を管理に反映するという山を目指す。④は、初級者を出しする必要はないかと思ったが、上級者のほうは定められたルールの範囲内で、自分の責任で自分の可能性を試すような冒険的な登山ができると書いてある。どうしても初心者側だけに合わせてしまうと玄人さんの欲求と合わない部分も出てくるので書いているが、ここは特出しをするかどうか議論した方が良いかと思っている。⑤として、全ての利用者は、屋久島の自然、畏敬の念を抱かせるものを継承することの重要性、人と自然のかかわりを学ぶ機会を得ることができて、それを理解、尊重して利用そのものもしていく山を目指したい。

(3)「人と自然の関わりかた、新しい山の文化を模索し、発信する山(島)」①は、利用者が屋久島に来れば、屋久島の伝統的な自然感や自然との関わり方を学ぶ機会を得ることができる山を目指したい。②には、島の方々は時代に応じた関係性を維持する、つまり、山との関係が切れていないということ。山に対する畏敬の念、感謝の気持ち、遠慮の心を持ち続けていて、世界遺産や国立公園の管理もそういったものを踏まえている、そういった山を目指したい。③は、島民と管理者は共に自然環境の保全や質の高い利用体験の提供を含む人と自然との関わり方を試行錯誤しながら世界・日本の見本や模範となるような新しい山の文化を発信し続ける山にしていきたい。「新しい山の文化」とは資料1にあるように、会議の中で出てきた一つのフレーズである。固定的なものというよりは、常により良い人と自然との関係を考えながら試行錯誤を続けていくという姿自体が「新しい山の文化」になると思っている。④として、屋久島が発信する新しい山の文化に惹かれて、お客さんが来て、屋久島で新しい山の文化に触れて、他地域でも「新しい山の文化」を広めてくれるという場所にしたいということ。

資料説明【基本方針】

次に基本方針になるが。1.2.は、未来像(1)に対応する。1.は自然環境を原生に保護していかなければ、自然の価値そのものや畏敬の念を感じさせるようなものを維持させることが難しくなる。2.は自然の価値そのものや畏敬の念を感じさせるようなものを維持していくためには、施設整備のやり方や維持管理もきちんと考えていかないといけない。やりすぎるとそういった雰囲気失われる。そうならない管理をすることと、それに応じた利用の質の管理をする。

3~7は未来像(2)に対応する。3.はルートごとに利用のランク分けをして管理方針を設定していく。会議の中で紹介したROSという考え方を取り入れてルートごとにランク分けをして、どういうお客さんを想定するのか、どういう水準の管理をしていくのかというやり方をして、いろいろなレベルのお客さんに対応するということ。4.情報の提供になる。ランク分けをしてお客さんが知ることができて、自分の経験や体力から選択できるようにするために、しっかりと情報発信・提供していくことが必要である。新しい山の文化へは、情報の発信というのが重要になってくる。5.は施設や公園の管理者の話になる。個々の施設の管理者は自らの責任というものを果たす努力をし続けなければいけないし、ルートのランクに応じた管理をきちんとやっていくことと、個々の管理者が個々でやっているだけでは隙間が生じてしまうので、緊密に連携をして一体的な管理体制を構築するといった姿を目指していく。6.

はモニタリングの話になる。体験の質、自然環境の影響をモニタリングして、その結果を管理に反映していくということ。そのモニタリングの結果を反映していくことは、ただ結果が出ただけでは難しいので、モニタリング結果がどうなったら対応策を考えると、対応策を講じるという基準を明確にするということを考えていく。7.は人と自然の関わり当を学ぶ機会の提供になる。施設やレクチャーを通じて、屋久島の人と自然の関わり、それから自然環境の保全、質の高い利用体験の提供に関する仕組みを学ぶ機会を提供していきましょうということ。

8~10は未来像(3)に対応するところになる。8.は伝統的な人と自然の関わりに配慮した管理とは、屋久島の自然に根ざした文化の基盤になっている人と自然の関わりに配慮した管理をしていくということ。9.は合意形成の話になる。屋久島は直接的、間接的に山に依存している方々が結構いるため、そういった方々で合意形成をしていながら自然環境の保全、質の高い利用体験の提供をしていくということ。10.には、意識を高く持った管理ということ。様々な課題があるなか、20年も完全な解決に至っていないものもあると思う。現状に満足することなくより良いものを目指してやっていくという内容である。

【質疑】

土屋 座長：資料2-1.2-2は非常に濃い内容のものだが、要点を踏まえて説明いただいた。これから12:30くらいまで議論していただく。途中で休憩を挟むので、70分が議論に使える時間になる。大きく分けて資料2-2では、【前提となる認識と考え方】P1~P3までで議論する。【未来像、目標】P3~P4で議論する。これが、狭い意味で言えばビジョンになるかと思う。その後の【基本方針】P4~5、これはかなり具体的にこれからどういった方向で管理や運営をしていくかが書いてある。さらに詳しい内容は、これから施設整備・維持管理、利用者管理とサービスの提供を作っていくときに議論するので、今回は議論せずに来年度になる。基本方針はこれからやることを具体的に書いてある。その前にビジョンといわれる未来像、目標があって、そのために当面やることとして中長期的な未来像の検討をして、基本方針は10年後くらいの短中期的なところを見据えてということになるかと思う。その前のところは、さらにその前提となるような考え方になる。重要なのはP3(3)①~⑥。これは、それから先のビジョンや基本方針を決めていくときに、(3)①~⑥では背景やこれまでの経緯や考え方を基にして、「こういう方針でやっていきましょう」という屋久島の山岳部利用や管理の考え方になる。ここではこの様に我々は考えていくことを示しているので、重要な部分になる。いくつかに分けて議論していきたい。ここで、基本方針にナンバリングがないので、10個の基本方針に番号を振ってもら。「何番の~について発言します」といっていただくと混乱がなく進められる。資料2-2を3つにわけて議論していく。一言フレーズ、キャッチフレーズは屋久島の特徴を言うのではなく、これからどうしていくのかを込める必要がある。それはここでも議論する。ぜひ発言のなかでも、何かあればアイデアを出していただきたい。

質疑 P1~P3【前提となる認識と考え方】

吉田 委員：P1について、二箇所修正提案をする。1つは、「花崗岩マグマがプレートを押上げて隆起した島である」とあるが、花崗岩はプレートを押上げてではなくて、フィリピン海プレートがユーラシアプレートに付加した付加体の堆積物に貫入して隆起したので、プレート押し上げてという書き

方よりは、「堆積物を貫いて」という書き方が正確だと思う。もう少し詳しい人に聞いて、正確に表現にしてほしい。それから、「大隅半島・種子島・屋久島」のところで、大隅半島ではなく大隅諸島の間違いだと思う。半島は諸島ではない。あとはP3の最後のところでは、(3)⑥の「日本・世界の模範・見本となる」は分かりにくいので、これは前の文章をうまくつかって、「日本の国立公園、世界の自然遺産の模範・見本となる」くらいに言ってもいいのではないか。それから、一言フレーズには「山への畏敬の念」を大切にする部分と、「質の高い自然体験の提供」という言葉が入るといいと思う。

土屋 座長：3ページの○にも①～⑥と番号をつける。一言フレーズは、「世界にアピール『新しい山の文化』の先進島」を個人的に考えている。

屋久島森林管理署 川畑署長：P2(2)「一方で、山は～」の部分で、本格的な林業は大正時代から昭和40年代なのかもしれないが、江戸時代から年貢等(平木)で島の経済を支えている。書き方としては江戸時代なのかもしれない。記録としては17世紀中期(1640年、1650年)から残っているので、表現を変えたほうがいいのかもわからない。

土屋 座長：本格的はともかく、歴史的にはその辺までさかのぼる。表現の仕方だと思うので、配慮願いたい。

荒田 オブザーバー：P2(2)の真ん中になる。「屋久島は本格的な岳参りの南限地となっている。」とあるが、岳参りの南限地というよりは、山岳信仰の南限地ではないか。岳参り自体の表現はおかしいと思う。

鹿児島県 羽井佐自然保護課長：P2(2)下から7行目「頭を垂れて手を合わせる続ける」は文字の修正が必要になる。「屋久島だけに残った自然に根ざした文化である。」とは、あえて記載したという説明だったが、残ったという他琉球の島々でもあったけどなくなったという意味合いになる。ここは単純に、「屋久島にあった」というのほうが正しいのかと思う。P3の④で、「地域の自然観、人と自然との～」だが、そもそもの屋久島の自然条件、冒頭の説明にある花崗岩の島である、水の島であることについて、管理の大前提という考え方なので、自然条件を踏まえた管理も含む管理にしたほうがいいのか。P3の⑤「過去・現代・将来の人と自然～」では「過去」が入ると過去の望ましい関係を実現することは難しいので、過去だけは切り離して書くほうが正しい表現になるのではと思った。

それから、質問になるが、全般を通して「ガイド」という言葉が出ていないと思う。①～⑥でいうと④「人と自然との関わりを～」の中にはガイドの存在が意識されていて、日本ではガイドが産業として成り立っている地域が少ないなか、屋久島でのガイド産業についてを含めた考えで記載しているのかを質問したい。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：最後の「ガイド」というワードが無いというのは、まだこのレベルでガイドという特定をする必要がなく、しないほうがいいのかという意味で使っていない。もちろん存在自体は認識しており、より良いものをつくっていくには、ガイドの存在の有ると無いでは全く違

ってくると思う。分かってはいるが、現時点では特定した記述はしていない。

九州地方環境事務所 加藤国立公園課課長：皆様のご意見を聞いて思ったのだが、P1～P2（1）には、学術的な話が冒頭に出ていて、一般の方には読みにくい感じがする。P2の1行目「琉球列島には、、、」にあるような、「屋久島はこういった島で世界遺産となっていて重要な島である」ということを冒頭で述べた方がいいのではないかと個人的には思う。（3）①～⑥は重要な内容だと思う。（1）～（3）は並列になっているが、前提となる認識と考え方として、（1）は屋久島のほかにはない「自然環境」、（2）は屋久島のほかにはない「人と自然とのかかわり」、これを受けて次世代へ継承することがビジョンの真髄になると思う。（1）～（3）の内容を受けたものが、一言フレーズにも入るのではないかなと思う。土屋さんからの一言フレーズ（案）も非常にいい表現だと思う。新しい山の文化とか、日本や世界に誇れる、発信する、先頭を切るという、気概を示す部分がこの①～⑥に現れてきて、一言フレーズに集約してくるのかと思ったので、その部分をもっと明示していければいい。①～⑥にも「新しい山の文化」という言葉が出てきてもいいのではと思った。

日下田 オブザーバー：会議の冒頭で説明されたかもしれませんが、読ませていただくと大変魅力的と思いつながらも視点は屋久島全体でありながらも、山岳部適正利用ビジョンということなのか？事業だということという名称だという意味以上に意味があるのか？

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：環境省は国立公園の管理、世界遺産の管理を担当しているが、その環境省が国立公園の枠や世界遺産の枠を超えて島全体のことをあまり堂々というのは差し出がましいというのもありながら、屋久島は山があって里があって海があるという全体で一つだということは資料1の意見の中にも明確に出ていたので、「〇〇の山」といった未来像を書きながら、山から島に置き換えたときにも、これであてはまるかなと考えながら未来像を作った。立場的には、これが島全体のビジョンというのは我々の立場では差し出がましいかと思っている。思いとしては島全体もイメージして作っている。

土屋 座長：座長としてどう思っているのか言わせていただく。以前からも同じようなことを申し上げてはいるが、この検討会を召集したのは環境省なので国立公園、世界遺産の範囲にとどまるというのは仕方ないこと。ただし、国立公園や世界遺産を考えるとときには全体のことも考えることになるため、我々はここで全体についても議論する。この成果が直接及ぶ範囲とは、当面は国立公園、世界遺産に限られる。その2つの地域についてはここで検討したものは、縛りとしてやってもらわないと困る。今後は、環境省が国立公園や世界遺産はこれをルールにやってもらわないと困るし、もしもそれから外れることがあれば私は個人的にも抗議するし、何らかの方法でちゃんとやってくれと言う。ただし、ほかの部分についてはそれはない。我々がしっかり議論して、しっかりした提言や考え方を打ち出せば、ほかのところで議論する際には必ず参考になるはず。そこで権限がある部署がそれを引用することは当然にありうる。事実上これが、町全体、島全体の考え方やルールの基本になってくるといったことが我々が望むことである。ただ、それは縛りにはならない。

吉田 委員：日下田さんのご意見にお答えするかたちになるが、こういった利用ビジョンのようなものは屋久島では作られては忘れられていくというのが多かったがそれは非常にもったいない。できればこのビジョンは環境省としては山岳部のほうでの活かし方になるが、林野庁、鹿児島県、屋久島町、島民の皆さんが集まって議論したのだから、このビジョン自体は、役所、島の方々も活かして行ってほしい。山岳部については、ゾーニングや施設整備という形で実現化するだろうが、それ以外の県や林野庁の施設に生かして使っていくしてほしい。ビジョンは今年度と来年度はじめて固める。このビジョンは様々なタイミングで話していくと思う。古くは環境文化村のビジョンがあり、世界遺産になり、更にユネスコエコパークも全島に広がるといった段階でのビジョンは初めてだと思う。そういった面では非常に大事である。このビジョンは全島に広がっていくことを意識して使っていく方がいいのではないかなと思う。

土屋 座長：P3の①～⑥はこれまでの、発言にも出てきたが、次のビジョンや基本方針を縛る、一番基本となるところ。基本方針の前なので「大方針、根本方針」なので、これでよいのかどうか。文言の細かい修正はあとできるが、この①～⑥について意見を出していただく。

柴崎 委員：P3の①～⑥の方針に関して、ビジョンでも資料2-1 ビジョン作成の目的でも「これまでの課題対応型保護管理だけでなく、先を見据えた能動的管理を行い」と書いてあるので、⑤には「過去・現在・将来の人と自然との関わりを意識したより長期を見据えた能動的管理を行う」とか入れるなり、ビジョンと連動されることがいいかなと思う。

鹿児島県 羽井佐自然保護課長：構造が分からなくなってしまった。【前提となる認識と考え方】(1)、(2)、(3)とあるが、(3)の中に①～⑥があるのか？(3)の中に無いのであれば、(1)、(2)と比較して記述が少ない気がする。この構造を教えてください。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：私が考えたときに次世代の継承とか、持続的な利用というのは、今の世の中ではスローガンにすることは当たり前だったので、(3)に(1)と(2)のような文章を書く必要はあまり無いかなと思った。(1)、(2)のいわゆる価値を踏まえた上で、次世代への継承、持続的な利用をしていくためには、しかもビジョンを作っていくうえで前提となる「これは当たり前前の考え方だね」ということを①～⑥で示している。この①～⑥と【未来像・目標】と【基本方針】は関連付けをしていたつもりで作ったが、抜けていることがあれば、言っていただければありがたい。

土屋 座長：羽井佐さんの質問では、(1)や(2)で自然や文化をたくさん書いてあるが、(3)は現代の利用についての記述が少ないという意見だったのか？

鹿児島県 羽井佐自然保護課長：今の田中さんからの説明を聞いて、(3)①～⑥までは(3)の中身なのですよね？そういうことであれば納得できる。

土屋 座長：私はそのように解釈ではなく、(1)は自然条件の話が多くて、(2)は伝統的なことを含

めた歴史的な経緯を述べて、もう1つこの議論の中で出てきているが、登山利用や観光利用を中心とした文化ができてきたことである。ガイドが根付いたガイドの文化、以前の検討会で、大山さんがおっしゃったごみが無い文化等々。そして観光文化村構想などの提言もこの文化に含まれる。「登山を主とする観光が多く島の暮らしを支えている」ようになってから以降に生まれた文化である。そうした新しい屋久島の文化もあるのではないかと。それも遺産として「新しい山の文化」をつくっていく上で非常に重要な部分かと思った。

吉田 委員：今の土屋さんの意見は、羽井佐さん問いの答えになっていないと思う。結局のところ、この上のタイトルは【前提となる認識と考え方】となっているので、「前提となる3つの認識と、6つの考え方」なのか「前提となる2つの認識と、6つの考え方」なのかよくわからないということだと思う。今の記述分量でいくと「前提となる2つの認識と6つのビジョン」とかにしたほうがいいのか。③がどっちなのかをはっきりさせたほうがいいのか。土屋さんからの意見にあったように、①と②は自然と文化の認識、③は前に打ち出していくことなので、認識ではなくてビジョンなのかと思う。その変の認識があいまいなままだと進まない。

九州地方環境事務所 加藤国立公園課課長：非常に大事なご指摘と議論をいただいた。私の今の認識はこの③①～⑥は切り離したほうが良いのではと思っている。田中首席の言われた中で、「損なわずに守り引き継ぐ、次世代に継承するというのはある意味当たり前」とあったが、自然環境の管理などの点や能動的にとりか、損なわない範囲での利用とか、現在の自然環境の管理の中では当たり前のことは言っておき、更に屋久島では、「自然の価値や畏敬の念を抱かせるものを」というのが屋久島のポイントかと思っている。屋久島の場合は、それも考え合わせれば、こういったビジョンの考え方になるとこの①～⑥に集約されてくるのかと感じている。この①～⑥は引き継ぐこと、利用すること、自然体験の提供という意味で、すべて管理の仕方の表現になっているので、どういった管理をするのか、どういう利用をするか、適正ビジョンの核にあたること書いてあると思うので、整理ができれば良いと思っている。

柴崎 委員：ガイド文化や提言は②に入れればいいのか。③で6つのビジョンか大方針になるのか。①と②をあわせて③ができているといった方がいいのではないかと。

土屋 座長：【前提となる認識と考え方】は議論していただいたので、③はこの題目でいいかは別として切り離す。これは管理の仕方の大方針・根本方針なので、つまりビジョンの前にくるものとして切り離すということではよろしいでしょうか？それでは、ここまでは決めたということにさせていただきます。この大方針については、これからも振り返るが、少し先へ行く。

質疑 P3～P4【未来像・目標(100年後の目指す姿)】

土屋 座長：ここがビジョンだと思っている。ビジョンとは、かなり先のところまでを含めて、どういったところにもっていくのか。もって行く先を示しているものだと考えている。このため、こういった書き方になっているかと思う。100年後は長すぎるかもしれないが、中期的に言えば50年後くらいの

ところで、ここまでゴールを目指す、目指す先を示している。それに基づいて、基本方針では当面は何をするのかになってくる。この部分は非常に重要。先が分からずに突っ走っても意味がないので、先を示すと言うことになる。これについて議論していただく。

柴崎 委員：未来像・目標が3つあることについては問題ないが、順番を(1)→(3)→(2)にしてはどうかと思った。(1)では原生性、神聖性を感じることができる利用者の体験の話をした上で、なおかつこの後で、発信する側の話(3)を(2)に入れ、(2)を(3)として初心者から上級者までのより具体的な話を前にもっていったほうがすっきりするかと思う。

荒田 オブザーバー：(1)「数千年レベルの時の流れ、循環、、、」と言ったタイトルだが、これだと同じ世界遺産の砂漠でも数千年レベルでの循環があるので、屋久島独自の、“生命の循環”とか“輪廻”とかを組み入れたほうがより屋久島らしいのではないかと思う。

吉田 委員：(1)～(3)の大きなところのタイトルで申し上げる。順番は変えたほうが良いという柴崎さんの意見に賛成する。(1)は長くて言っていることがよくわからない。原生性と神聖性、自然の恵みと厳しさは「と」でつないでいいと思う。数千年レベルと決めていいのかと思う。山に登ると1,500万年前くらいに花崗岩が隆起してこういった山ができたと感じられる島である。数千年と決めてしまわないほうがいい。ここは「悠久の時の流れ」なのか「人と自然のつながり」なのかいい言葉にはできないが、真ん中部分はもう少し考えたほうが良いと思う。

それから、(2)初心者から上級者までとなっているが、初心者と上級者とはレベルの違いだけを行っている。初めて登山靴を買って、屋久島に登ろうという人が多くなっている。昔は首都圏であったら丹沢や奥多摩で訓練してから来る場所(屋久島)だった。今は山道具屋に行くと、富士山か屋久島のどちらかで登山靴を販売している。だから、初心者というよりは入門者ではないか。不思議なことに屋久島が事実上の登山入門になっている。しかし、ずっと初心者でいるわけではなくて、上級になる人もいる。そういったところが、単に初心者と上級者という書き方では伝わらないかと思う。入門の人も、素晴らしい体験をすることで、他の日本の山に行くようになるかもしれない。その辺について、ガイドさんの意見も聞きたい。

土屋 座長：ちょうどガイドさんという言葉がでたので、発言いただきたい。

屋久島観光協会 中馬ガイド部会長：検討会の1回～3回は出ていないが、私も初心者から上級者という言葉に違和感がある。去年は沢で流されるといった事故があった。流された方のなかには上級者もいた。上級者でもルール範囲内で自らの責任のもと自分の可能性を試す登山をしたと思うが、それでも事故に遭遇すると思うので、山に対しては上級者という言葉は違うかと思う。初心者の気持ちで屋久島の山にかかわってもらえればといいと思う。初心者の方でも安全に登山できるとか、ガイドが責任をもってやっていきたい。上級者についての文言は違う言い方があるのではないかと思う。

土屋 座長：上級者について、他に言い方はないか？

屋久島観光協会 中馬ガイド部会長：上級者の基準をどこにするかだと思う。他の山でいくら経験をつんでも屋久島の山であれば上級者といえるのかとか、その辺を冷静に踏まえて自己管理できるのであれば、上級者だと思う。上級者という言葉だけでは、わかりにくいところが沢山あると思っている。

土屋 座長：ガイドの経験のある方、何かあれば意見をいただきたい。

大山 オブザーバー：山というのは上級者とか初心者というよりかは、自然をどう堪能するかになる。いくらベテランでも事故は起きる。事故からは自分で守るものだというルールを記載しないと、いくらガイドがベテランでも前を歩いている人間を止めることはできない。そういった不可抗力が沢山ある。山に登ることは危険があるということを各自がもたなければならない。

傍聴(小原)：上級者ということだが、これは単なるグレードではなくて、分野がある。登山という中でも登山道を歩く登山から沢登りもあればロッククライミングもあるし、雪山登山もある。マウンテンバイクやトレイルランなどでも国立公園が使われている。いわゆる登山ではないと思う。沢登りをどう位置づけるか丁寧に考えていく必要がある。入門者から上級者というよりは、様々なグレードでとか様々な分野でという意味が入ればいいのではないかと思う。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：昨年度この会議を始めたときに、渡邊さんから岩とか沢の話があって、そのときに返答した内容を再度お答えする。基本的には沢登り、岩登りというジャンルがあるという認識をしているが、この会議では一般の登山道の利用のあり方を検討してきているところである。

柴崎 委員：そういう書き方をするのであれば、注釈で沢登りとか、どういった範囲に入るとかを注意書きした方がいいのかもしれない。全部を登山者に入れていいのか微妙なところもあるが。

鹿児島県 羽井佐自然保護課長：(1) タイトルの最後にある「残る」ということばは寂しくも感じるので、もう少し最後に残ったというフレーズでない方がいいのではないかと。(1) ②「人間の存在がいかに小さいか」については受け止める人で変わってくるので、これを目指す姿として書いていても人の心は誰もしばれないところがある。また、人間の利用によって、侵食といった事象も発生しているのでここに決め付けて書いていいのかと感じる。(2) ②の「安全が保障されている」という書き方は田中さんの説明で十分に理解はしているが、安全という言葉の印象は「安全」だと感じるので、あえて安全度、危険度とか、いわゆる「安全」ではない表現にしたほうがいいのではないかと。(2) ③の「悪影響をモニターされ」とあるが、悪い影響か良い影響なのかは100年後の目指す姿なので、確実に分かるものではないので、「変化をモニターする」といった表現のほうがいいのではないかと。(3) ③「世界の模範・見本となる」、④「新しい山の文化を他地域に広めていく」は吉田さんにお聞きしたいが、管理が世界の模範・見本となるだと納得できるが、「文化」を世界の模範・見本と直接的に言ってしまって、文化の押し付けのような批判を受けないかとも思う。世界遺産委員会とかで、どういった表

現をしているのか。「典型」とかいう言葉をうまくつかって表現していた気がするので、この辺の表現についてはもう少し考えたほうがいいのではないかと思った。

土屋 座長：文言についても色々なご意見が出ているところだが、言いたい方は躊躇せず言ってください

屋久島山岳ガイド連盟 渡邊事務局長：羽井佐さんからも、「100年後」という言葉がでたが、100年後は長すぎるので今の時点で50年後とかに変えてほしい。個人的にはもっと早く、30年後ぐらいに実現して欲しい。

土屋 座長：私も50年後くらいでいいかと思っている。

大山 オブザーバー：考え方でいえば300年でも足りないと思うし、ヤクスギは1,000年以上ということで、基本的には1,000年が1つのスパンというか、山が崩壊するのは1,000年に一回という話もある。屋久島をそんなに短い時間では考えていないということでもいいのではないか。

土屋 座長：これは行動を実行して、その理想をいつまでに実現するかということなので、基本方針は10年くらいだが、10年ではできないことも沢山あるので、そのゴールをどこに設定するか。つまり300年というのは誰も残らなくなってしまうので、もう少し短いほうがゴールとしてはいいのではないか。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：最初は50年、100年という言葉が会議で出ていて、50年、100年のままにしていたが、50年後と100年後ではだいぶ違うので、どちらからスタートしようかといったときに、ポジティブな会議にしたかったので、まずは100年からスタートして、皆さんから長すぎると言われたら、もう少し短く修正のほうがいいのではないかと考えていた。ただ、ものによって、未来像(1)は数十年ではできない場合もある。しかし人間がアクションすることでいえば100年は長すぎて、ここにいる人は皆いなくなっているの、少しイメージしにくいと思う。

九州地方環境事務所 加藤国立公園課課長：屋久島の自然の姿そのものとか、生物多様性国家戦略でも100年を打ち出しており、自然の姿そのものについては100年、1,000年とか大きいスケールが当然ある。一報で、この未来像について、こういった利用がされているとか、その中に人に姿があるものなので、それを考えるとその姿が50年後には実現してほしいとか、もっと早くそういった形が増えてほしい希望が皆さんの中にはあるとすれば、50年とかでいいのではないかと思う。(3)の新しい山の文化を発信するということでは、一方的に発信するのではなくて、それを受けて山に来た人がそこで得たものを持ち帰って、他にも広げていく。ループしながらいい利用がつくられていく感じがいいと思った。相互作用のような点をもっと出していいかと思った。屋久島ならではの体験をすることで、初心者や上級の話はあるかと思うが、一般的に上級のスキルをもった人が屋久島に来て初心に戻ったり、初めて来たが、屋久島で少し体験をしたらもっと得られるものが大きかったとか、来た利用者が

屋久島の利用のあり方を他の場所にも波及していくとか、利用のいい循環が生まれることを意識したらいいのではないかと思った。

土屋 座長：加藤さんから出た最後の意見はこの中には入っていないので重要だと思う。50年、100年もここで結論するわけにはいかない。50年前というと1968年なので前の東京オリンピックが終わった頃になる。新幹線が走り始めたころ。100年前は1918年、第一次世界大戦が終わったころになる。日本が大陸に出兵しだしたころである。

九州森林管理局 佐藤自然遺産保全調整官：(2)②の「安全が保障されている」という文言については、目指す姿の中で安全を確約することは不可能だと思うので修正をお願いしたい。それから(1)【注】の利用者については、ここで注釈をつけるのではなくて、誰が利用者なのかを明確にしてほしい。(2)⑤には「すべての利用者」という文言が出てくるので、意味が違ってきることかを感じるの、注釈をつけるのか、もっと明確に記載するのかをしていただければと思う。

土屋 座長：一旦ここで切ります。この後の基本方針のところでも議論していただくこととする。

【休憩】

土屋 座長：ここからはP4の【基本方針】について議論する。日下田さんがもうすぐお帰りなので、冒頭でご意見をいただきたい。

日下田 オブザーバー：勝手ながら退席しますので、一言だけ発言する。先ほど山岳部という話がありましたが、ここに示されている方針が今後は広く生きていくことを期待しての発言だった。具体的に細かいことではないが、これを読んで大いに期待する部分がある。昨年度の第1回検討会資料で配布された他地域のビジョンと比較して、非常に文化というか人の見方みたいなものをきっちり踏まえている。非常に屋久島らしい特徴ある方針だと思った。そういう意味では評価するし、大いに期待したい。ぜひこれだけは申し上げたい。

質疑 P4～P5【基本方針】

土屋 座長：全体に関する意見だった。基本的には、10年間くらいの間にはやることは何かを、先ほどのビジョンもしくは未来像・目標を踏まえて実際にやるのが基本方針になる。これから何をやるかが、ある意味で縛られる。

吉田 委員：10年間くらいなので、ある程度予測できることはいれておいたほうがいい。そうすると二つくらい抜けていることがある。一つは、現状でもそうだが、海外からの観光客・登山者が増えている。それに対する基本方針がここには書かれていない。それはもちろん多言語による情報の提供もあるし、ポイントを絞って行くだけではない楽しみ方をする人たちが増えていくことへの対応だとか。そういったことへの対応方針がここに出ていない。もう一つは、万が一、観光客全体が増えた場合の対応が

書かれていないがそれはそれでいいのか。そのときには、こういった考え方を入れていかないとコントロールが難しいということがある。その部分を入れなくていいのか問題提起する。

土屋 座長：吉田さんからは、1～10に入りきらない二つの点をご指摘いただいた。

鹿児島県 羽井佐自然保護課長：2.「過不足のない、、、」というタイトルに対して、本文では整備過多と維持管理過剰と書いてあって、不足が書いていない。これはタイトルと本文が一致していないので整理が必要かと思う。1.「今も人を寄せ付けない、、、」という表現は、読み解き方が難しい。いい代替案はないが、恐ろしさを感じる環境を現状よりも向上させるというところだけ摘んで読むと、こういった雰囲気の山を目指すのか読み取りにくい。

土屋 座長：行政でも他の部署の方で発言をどうぞ。

鹿児島県 PR・観光戦略部観光課 迫田係長：5.「個々の管理者は責任を有する施設等について、、、」とあるが、ここの大前提として個々の施設の整備のあり方、役割分担というところを少し盛り込んでいただきたい。これが個々の施設管理者というのが今の現有施設の管理者と見える。ビジョンとしては「国や県、町の役割分担あって、それに基づいて、それぞれの施設管理者は、、、」といった前提が欲しいと思っている。

土屋 座長：迫田さんのご意見は、ここは県で、ここは町でということではなくて、役割分担をこれから明確にしていくことを言及すべきだということですね？厳密におそらく31年度以降はそこをやることになるので、そこをしっかりと記載するということですね？

鹿児島県 PR・観光戦略部観光課 迫田係長：中身に盛り込む、盛り込まないは別として、そういった共通認識を持っていただきたいと思っている。

土屋 座長：ありがとうございました。他の方はいかがでしょうか。

柴崎 委員：3.「屋久島なりのROSを取り入れた」とあるが、ROSが最低基準なのでLACやVERPも意識して6につながるように「ROSなど」にしたほうがいい。管理に協力する人たちを巻き込んで、管理に対する関心や意識を高める取り組み。現在、管理にかかわっている人達だけでなく、地元の子供たちとか、そういった人たちも含んだ教育的要素も入れたほうが良いのかと思った。

土屋 座長：ありがとうございました。町役場からのご発言はいかがでしょう。

屋久島町役場 松本商工観光課長：2.「過不足のない、、、」というところは、地元としては“過”のほうは実感としてないが、お客さんと呼ぶ側の立場としては、“不足”を議論しないと厳しい。決して華美になるということではなく、今が不足しすぎている。観光のほうでこういった理念でおいでくださいと

申し上げても、そこで完全に興ざめするような状況が少しある。ここ10数年ずっとあたり触らずの議論をしてきた。いい機会なので、その2については不足もきっちりと議論していくことが必要だと思っている。最低限というか、お客さんが納得できるような施設の充実が必要。5もそういった意味では非常に大事だと思う。

宮之浦岳参り伝承会 中川会長：8.この文章がよく分からない。「自然に根ざした文化」と「伝統的な人と自然の関わり」は同じことに読める。言わんとしていることは分かるが文章はもう少し練ったほうがいい。「自然に根ざした文化の基盤となっている」はとってしまってもいいかもしれない。

土屋 座長：上のタイトルに違和感はないですか？

宮之浦岳参り伝承会 中川会長：はい。内容に問題はないが、文章がわかりにくい。

前にさかのぼってよければP1（1）自然環境のところ長い。改めてこんなに細かく書く必要があるだろうか。（2）人と自然との関わりに関してはこれくらい書く必要があると思う。

屋久島町役場 矢野環境政策課長：入山協力金をいただいているが、利用者の負担という観点からの文言をいれたらどうか。山の管理ということで、サルやシカの適正管理をしているが、これについてもどこかに入れるべきではないかと思った。

土屋 座長：今回は決めるところまではいけない。ただし、骨子はこれで変わらなくて、表現の仕方や足りない部分の指摘をいただいたので、おそらく来年度の第1回検討会で検討して確定していくという流れになると思う。まだ少し時間があるので、コンパクトに発言をお願いします。

熊毛支庁屋久島事務所 吉原総務企画課主幹：3になるが、「屋久島なりのROSを取り入れた考え方で、、、」と記載があるが、柴崎さんからも説明はあったが、一般の方がこれを読んだときに、ROSの意味がわからないと思うので、注釈とか分かりやすい表現をいれてもらいたい。

土屋 座長：ROSに日本名があればいいと思って、散々議論した挙句にいい名前が無かった。

九州地方環境事務所 本田自然再生企画官：7になるが、お客さんは宿泊施設を利用する機会があると思うので、そういったところで施設の方々の勉強会といった機会も加えてみたらどうかと個人的には思うので提案させていただく。

土屋 座長：本田さんからの意見も重要だと思う。

柴崎 委員：4になるが、危険性だけでなく、一般の人が入れない場所については情報を制限するわけではないが、情報の発信の仕方でも公的機関として、あまりにも難易度が高い場所に安易に行けてしまうので、情報発信の持続的な利用についても、どこかに記載したほうがいいのかと思う。

土屋 座長：情報発信の倫理コードのようなものと解釈していいのか？

柴崎 委員：はい。

吉田 委員：先ほど自分が「万が一、観光客全体が増えた場合の対応が書かれていない」と発言したが、それにレスポンスをする。今後、利用者の量が増えたときの対応とは、量だけの問題ではなく他にも状況変化することがあるので、ここに書いたとしても10年以内に大きく状況が変化してきたときには「こういったことをする必要がある」と書いておいたほうがいい。

土屋 座長：吉田さんからの意見は非常に重要なこと。順応的管理、進行管理とも言うが計画を作っているときには、野ざらしにしないよう、常に見直しをするし、計画の途中であっても明らかに重要な変更が必要な場合には見直していくことをどこかに記載する。書いてないことを理由に、野ざらしにされることがある。

ここまでで、今日は質疑終了にしてよろしいか？こうなることは見えてはいたが、ご意見をいただけてなかった方もいらしたし、ご意見をいただいた方でももっと言いたかった、議論の中で新たに考えたこともあったかと思う。それは、次の会がだいぶ先になる可能性があるので、事務局へお知らせいただきたい。それを報告書へ反映するし、来年度の検討会に反映することとなる。それではいったんここまでで議論は打ち切る。ありがとうございました。

■ その他(検討の進捗状況と次年度の予定)

◇ 資料3について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官:今年度は4回の検討会で終了になるが、この検討全体は説明したとおり、5ヵ年計画でやってきている。来年度は、今日はビジョン(素案)を検討して、ご意見をいただいたので、それを踏まえた修正等を加えて来年度の第1回検討会もしくは第2回検討会までにはビジョンを固めて、その次に登山道ランク分けとルートごとの管理方針の検討をしていきたい。来年度もできれば検討会は4回開催したいと考えている。31年度以降にはルートごとの方針やランクが決まったあとに具体的な整備水準の議論を続けていきたい。2ページ目は全体の検討状況ということで、これまでの28年度、29年度でここを検討した、30年度以降はこれをやっていくということを記載している。3ページ目は検討会を始めたときに、成果物(骨子)のイメージを示したものになる。今日の資料2-1.2-2.がこの中の、4.に該当する。

【質疑】

土屋 座長：まだこれから議論は来年度以降も続くという説明だった。ここで、今日議論したような全体の構成、骨子については、これから付加することはあるが、構造的には背景があり、(3)①～⑥があり、目標・未来像があり、基本方針となっている、この骨子は認めていただいたということでよろしいでしょうか？ここでピン止め(合意を得る)をしないと、決まってなくて一番初めに戻ってしまう可

能性もあるので、この場で認めていただいたということによろしいでしょうか？はい、ありがとうございます。ありがとうございました。

他のスケジュールについて、何か質問があれば。

柴崎 委員：吉田さんの意見と同じで、トッピーの収容量増加や空港拡張後の利用者増加などの事態も想定して、それについて議論したほうがいいのではないかと。議論する場合には、この資料3でいったらどこになるのか？

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：より全体的なことというのであれば今日の資料2-2に、何かしらそういった記述がないといけないと思う。資料2-2の4ページ【基本方針】6には、そういったことへの対応も頭に置きながら作ってはいたが、この記述だとモニターしてその結果をみてリアクションすることしか読めないの、足りなかった部分があると思った。【ビジョン作成の目的】の「先を見据えた能動的保護管理」の部分を見ると、書き足りなかったと思っている。個別では30年度に、登山道のランク分けをして、それぞれのルートの管理方針を考えていく時に、それぞれのルートでそういったことを想定しながら検討していくことがいいのではと思っている。

柴崎 委員：田中さんからの話を聞いていて思ったことが、ゾーン設定をして了承をとるときに、このゾーン設定をすることで将来的な不確実性にも対応できるといった確認を毎回とることがいいかと思う。

土屋 座長：スケジュール等についてはよろしいでしょうか。これで議論を締めたいと思います。ひとまず来年度の検討会がいつから始まるか見えないところもある。おそらく全員が同じメンバーではないかとも思うので、できるだけ早くこの続きを来年度進めたいと思っている。早く皆さんとお会いしてこの続きをしていきたいと思っている。

■ 検討会終了の挨拶

九州地方環境事務所 加藤国立公園課課長：大変お疲れ様でした。内容の濃い建設的な意見が出たと思うので感謝している。今年度は4回検討会があったが、少し文章になってきたかと思感をもっていただけかと思う。おそらく今日、案を聞きながら読んでいて、皆さんにはなかなかいいなあと思っていたかと思う。皆さんが、日常的に山に入ったり、生活している中で、ここに書いてあることと実際には乖離があるかもしれないことと、書いてはあるがどう実施するのだろうかということ、次の検討会、また検討会以外の機会でも思うところを言っていただいて次の議論に生かしていきたい。今年度はいったん区切りになるが検討は続くので、屋久島のこの先のためにこの場が役立つことを引き続きお願いしたいと思う。